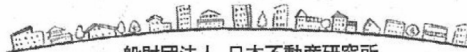


～文化的歴史的所産を巡る～

残したい情景

最終回 大阪府堺市



一般財団法人 日本不動産研究所

宿院の交差点近くに今も残る
千利休の屋敷跡



堺は平安時代、摂津・河内・和泉の国境に位置したことから「さかい」と呼ばれるようになったとされる。戦国時代には、堺は日明貿易や南蛮貿易の拠点として国際貿易都市へと発展する。堺に滞在した宣教師ルイス・フロイトは堺を日本の最も富める港で、日本国内の金銀の大部分が集まる所と表現し「東洋のベニス」と著書に記載した。

堺・宿院界隈の情景

伝統・文化が息づく町並み

戦火で焼失

現在の市街地は大阪夏の陣による戦火や第2次世界大戦の空襲により、二度にわたって焼失したため、戦国から安土桃山時代にかけての堺の黄金期を物語る町並みは残っていない。しかし、当時の栄華は知るよしもないが、堺市堺区の宿院界隈を散策すると当時の跡地や伝統が残されていることに気がつく。

堺では鉄砲生産等が盛になり、千利休や今井宗久に

現在の市街地は大阪夏の陣による戦火や第2次世界大戦の空襲により、二度にわたって焼失したため、戦国から安土桃山時代にかけての堺の黄金期を物語る町並みは残っていない。しかし、当時の栄華は知るよしもないが、堺市堺区の宿院界隈を散策すると当時の跡地や伝統が残されていることに気がつく。

観光客等にとっては貴重な観光資源である。宿院界隈には地元の人たちも遠方からも多くの客が訪れる店舗がある。それは1532年(室町時代末期)創業の「本家小島屋」や1329年(鎌倉時代末期)創業の「かん袋」である。どちらも和菓子屋であるが、「本家小島屋」が今日残るのは、味はもちろのこと千利休が「本家小島屋」のけし餅を好んだためと言われ、「かん袋」が今日残るのは主人の和泉屋徳

ニックス通り」と北東から南西へ縦断する大道筋の交差点に宿院の交差点から南西近くに千利休の屋敷跡とされる跡地が残っている。また、宿院の交差点から北東近くの大道筋の歩道には明治から昭和時代に活躍した歌人と謝野晶子の歌碑と記念碑が建立されている(ここはかつて与謝野晶子の生家である和菓子屋の駿河屋があったが、現在は大道筋の道路敷となっている)。地元の人にとっては見慣れた情景で千利休の屋敷跡や与謝野晶子の記念碑の前で足を止めることはないが、堺を訪れる

左衛門が大阪城の屋根の瓦ぶきに加勢し、次々と瓦を屋根に放り上げるさまを見た豊臣秀吉が「かん袋が散るさまに似ている」と和泉屋の商号をも影響しているようだ。

文化・観光の拠点

歴史と伝統に裏付けられ、現代人にも受け入れられるものであれば、それが食べ物であれ、着物であれ、サービスであれ、人は訪れ、お金を出すのである。堺市は千利休や与謝野晶子の築いた文化を体感できる施設「さかい利晶の杜」を千利休の屋敷跡の向かい側に建設した。「さかい利晶の杜」は地元の人をはじめ、国内外からの来訪者が増加し、堺市における文化・観光の拠点となりつつある。

市街地の情景は時代によって移り変わるものであり、自然の風景のようにそのまま残るものではない。残すべきは現在の情景そのものではない。そこに根付いた伝統と文化が市街地の情景の中に残ることが大事なのである。宿院界隈が歴史と文化の町、堺の伝統と文化が息づく地域として様々な人に愛着を持たれる町並みになることを期待する。(近畿支社/不動産鑑定士・久保豊)

※お知らせ・再来週より新シリーズ「点検 不動産利活用」が始まります。



④大道筋に建立された与謝野晶子の歌碑と記念碑 ⑤千利休の屋敷跡の向かい側に建設された文化体感施設「さかい利晶の杜」

